

二〇一三年六月十八日 開催

## 新聞、テレビ、そして GLOBE…報道の現場から

三浦俊章

(執筆 今千春)

■ 講演者……三浦俊章(朝日新聞 GLOBE 編集長)

■ 司 会……水野孝昭(本学アジア言語学教授)

本レクチャーは現在朝日新聞 GLOBE 編集長をつとめる三浦俊章氏を講師に迎え、テレビ、新聞、とくに GLOBE といったメディアを通して報道することについて、それぞれのメディアの特性や現在置かれている状況、そしてあらゆるメディアに共通して「情報を伝える」とはどういうことなのかを報道の現場の視点からお話いただいた。

まず司会の水野教授より三浦氏の紹介があった。三浦氏は、早稲田大学政経学部を卒業後、朝日新聞社に入社し、政治部、ワシントン特派員などを経て、二〇一一年四月から二年間、テレビ朝日系列「報道ステーション」のコメンテーターをつとめた。この間、ワシントン特派員時代の経験にもとづいた『ブッシュのアメリカ』を発表している。そして、二〇一三年四月からは朝日新聞の GLOBE 編集長として報道に携わって

いる。この「The Asahi Shimbun GLOBE」は、毎月第一、第三日曜日に発行されており、さまざまなテーマで世界の現象を特集しており、わたしたちにグローバルな情報を伝えているものである。

講演はまず三浦氏がコメンテーターをつとめていた「報道ステーション」が取り上げられ、テレビというメディアについての考えが示された。この「報道ステーション」は、テレビ朝日で二時五十分から始まる報道番組である。同様の番組に、NHK ニュースなどが放送されているが、これらの番組との最も大きな違いは、「報道ステーション」ではプロンプターを使っていないということである。これは、テレビの前の視聴者にできるだけ生の声を伝えようとしているためで、ニュースをはじめ、スポーツや天気にといたるまで、担当者が自分で原稿を考えて作成した上で、それを覚えたり、本番で話したりしている。また、キャスターである古舘伊知郎氏とコメンテーターである三浦氏もあらかじめ打ち合わせの時間



講演する三浦氏と、水野先生

は極力もたず、本番での生の新鮮さを保つようにしていた。このように、テレビの民間放送局は意外性や生の感覚を重視しており、「感情のメディア」であるといえる。しかし、それゆえ視聴者の感じ方もさまざまであり、ときには反発を招くこともある。とくにテレビの場合、新聞の読者が記事を始めから終わりまで読むとは異なり、視聴者はニュースのす

べてを始めから終わりまで見ていないこともある。よって、ニュース全体の文脈よりもニュースの一部分のみを見てしまい、その一部の映像の印象や話の内容から報道が判断され、テレビ局に抗議が殺到することもある。さらに、出演者の服装が視聴者の感情を刺激することもあるため、報道するニュースの内容にあわせたスタイリングが求められるという。このように、テレビは「感情のメディア」であるが、ここには新鮮さというプラスの面だけではなく、負の側面もあることが難しい問題となっている。

さらに、最近のテレビは映像の力が強すぎることもまた問題とされる。映像があまりにも強くなったため、人々の発言が伝わらなくなり、結果として以前はほとんど使用されていなかった画面上の字幕テロップなどで活字を示さなければならなくなった。そのため、テレビでは、視聴者に報道を一つ一つ立ち止まって深く考えてもらうため、映像をどのように伝えるべきかという課題が大きくなっている。

こうした問題は、コメンテーターであった三浦氏にとって重要な位置を占めていた。もともと新聞という活字のメディアにいた三浦氏がここで重視していたことは、映像から人の言葉の力をどうやって守るか、映像に押し流されないで大事なメッセージや物事をどのように伝えるかということであった。とくに、コメンテーターは限られた短い時間で伝え

ることが必要とされたため、繰り返しを避ける、可能な限りシンプルに話す、一つ一つのメッセージを短くするといった工夫を重ね、言葉を守ろうとしていた。

現在は再び新聞という活字の世界に戻り、「GLOBE」の編集長として言葉を伝えている。この「GLOBE」は朝日新聞の日曜版として二〇〇八年に創刊され、現在一一三号まで発行されている。一〇〇号が発行された際には、記念誌も発行された。

この「GLOBE」は従来の新聞記事とは異なり、ビジュアルな部分も取り入れている。言い換えれば、言葉の側から映像・ビジュアルの世界に打って出たメディアなのである。しかも、こうしたビジュアル面のデザインは、すべて社外の専門のデザイナーが手がけており、本格的なものになっている。たとえば、一一三号の表紙のデザインを決めるにあたり、社外のデザイナーとともに「海の境」というタイトルから「海に境界をひくこと」の意味を考え、実際の海の写真を用いるのではなく、むしろ抽象的なイメージを表すため、九十九里浜で溝を作ることで「海の境」を表現したという。また、個々の記事内容についてもビジュアルを活用している。とくに「GLOBE」は日曜版であるため、硬派な記事だけではなく、身近な話題も掲載している。たとえば、一一一号のアフリカ特集もその一つで、アフリカという遠い地域を身近に感じ、

味わうために、記事の内容に加え、活字の大きさやデザインといったビジュアルな面からアフリカのおもしろさを伝えることを試みている。

この「GLOBE」の歴史はまだ浅く、創刊からまだ五年ほどしか経っていない。通常の新聞に加え、プラスアルファの情報が見たいというニーズに応え企画され、当初は雑誌での創刊も検討されたが、より多くの人に読んで欲しいという気持ちから、朝日新聞の読者全員が読める日曜版での発行にたつたという。当初は四ページのみであったが、現在はページ数を増やして発行している。また、二〇一二年の第八三号からはサイズが現在のコンパクト版になり、通常の新聞の半分のサイズとなっている。一〇〇号の記念誌では、これまでの全号の表紙一覧に加え、読者へのインタビュー記事や過去の特集記事、記者の活動などが紹介されている。

調査によると、現在は朝日新聞読者の二人に一人が手にとっており、平均で十一分の時間を使って読んでいるという。これは、「GLOBE」をばらばらとめくって、おもしろい記事をいくつか読むのに十分な時間である。読者の年代は、三〇代〜五〇代の閲覧率が高いという。一方、二〇代の読者もあり、若い世代ほど閲読時間が長くなっているという。このことから、毎号読むわけではないが、気に入った号であれば徹底的に読むという若い世代が増えていることがうかがえる。

実際、学生から「このテーマで特集して欲しい」といった声が編集部にも届くことも多い。

「GLOBE」の記事を作るには、多くのプロセスと長い時間がかけている。通常の新聞記事では、記者が日々起きていることを取材し、三〇分から一時間ほどで記事にして提出し、デスクがチェックするという流れで掲載されていく。これに対し、「GLOBE」は一つの特集記事を三カ月ほどかけて作る。まず、特集のテーマを決定し、取材班が組まれる。その後、取材班によって一カ月ほどリサーチや議論が繰り返され、編集部全員での議論も行われる。そして了承が得られた後、取材班が現地に向かう。これは、「GLOBE」のテーマが単なる外国を紹介するだけではなく、世界の中で日本語で考えること、世界に出ると日本がどのように見えるのか、あるいは日本の問題がどのように世界につながっているかを考えることであるため、直接海外の現地を訪れて取材を行っているのである。こうして海外での取材を終え、掲載の三週間ほど前に原稿を書き上げ、提出する。その後、二週間前に二度輪読会を行い、それをたたき台にしてさらにもう一度議論して原稿を書き直す。このような輪読会と議論を経て、原稿が磨き上げられていくのである。さらにその中には、社外のデザイン事務所との議論も含まれている。先に述べたとおり、「GLOBE」は「ジュニア」を重視しているため、特集記事のデ

ザインも単なる挿絵ではなく、デザインによって何を伝えるかについて互いに何度も話し合いを重ねながら決定している。このように新聞の記事とデザインとを合作で作るといのは新聞では新しい試みとなっている。

さらに、「GLOBE」は、新聞以外のさまざまな媒体と提携し、多面的なメディアを目指している。そのため「GLOBE」の記者は、取材し、記事を書くだけでなく、新聞以外のメディアに進出している。一つは、BS放送テレビのBS朝日でのニュース番組出演である。この番組は「いま世界は」で、毎週日曜日の十九時から二十二時まで放送されており、各国のニュースや世界の動きなどを掘り下げて伝えている。第一、第三日曜日は「GLOBE」の発行日であるため、それに合わせて同番組でGLOBE特集が生まれ、そこに記事を書いた記者が出演する。記者は、取材の際、自分でビデオカメラもまわして映像をとっている。その映像をもとに番組がつくられ、スタジオで記者がコメントーターとして出演し、他の出演者とディスカッションを行うのである。もう一つは、大学での講義である。上智大学の新聞学科と提携講座をくみ、記者が「GLOBE」で書いた自分の記事をつかって講義をしている。最近では、すでに書かれた記事だけではなく、これから行う企画について学生と議論し、アイデアを出すという授業も行われている。

また、「GLOBE」の特色としては、記者の多様性および教育機能があげられる。通常、新聞社は政治、経済、スポーツといった部局に分かれており、それぞれの専門領域で記事が書かれている。これに対し、「GLOBE」には各部局から記者が集まっている部局であり、さまざまな専門をもつ記者たちがともに一つの新聞を作っているのである。先にも話があったように、「GLOBE」の記者は海外での取材が必須であるため、必然的に語学力が求められる。原則として「GLOBE」では英語通訳を介さないことになっているため、最低でも英語を使った取材は行わなければならない。実際「GLOBE」にいる記者は、必ずしも全員が英語が堪能なわけではなく、中にはサバイバルな英語を使うこともあるが、みな取材に向かう強い気持ちをもっており、それが最も重視される資質であるのかもしれない。このように、新聞記者、とりわけ「GLOBE」の記者は個々の能力を活用して取材し、それを言葉にして記事にしなければならないのであるが、こうした能力は何度も取材の経験を積むことによって培われるものである。そのため、「GLOBE」では有能な記者を集めるのと同時に、よい記者を育てることが求められているのである。

ここまで、テレビ、そして新聞「GLOBE」の二つのメディアについて、それぞれの現場の視点からその特徴や課題が提示されてきた。しかし、両方のメディアに共通しているのは、

情報を伝えるのは人間だということである。誰かが言った情報をそのまま広げるのはデジタルでもできる。しかし、その出来事を実際に誰かに会って確認したり、そこで感じたことを話したりし、それらを言葉によって伝えることができるのは生身の人間だけなのである。そのため記者は、自分が現場に足を運んで実際に見たり聞いたりすること、そして現場の人の言葉や気持ちを受け止めることが求められる。こうした豊かな経験や読んだ本、そこから自分自身が何かを感じていくことで人生がつくられていくのであり、出発点となるのである。つまり、記者という仕事をするということは、自分という人間の総体として何をつかめるかが原点となっているといえる。結局、メディアが戻るところは人間なのである。

以上、三浦氏による講演があった後、質疑応答の時間が設けられた。

まず、会場から東日本大震災のときのテレビ番組のあり方について質問がなされた。当時のテレビは被災地の人々への配慮からバラエティ番組やCMの自粛を行っていたが、実際はそれに対する反発や震災映像に偏った放送への苦情が寄せられていた。これについて三浦氏は、それが全国放送の難しさであるとし、ある報道をどのように受け止めるかは地域によって異なるもので、その差は埋めることはできない、これを理解した上でバランスをとりながらやらなければならない

いとした。

次の質問は、最近の若年層のメディア離れについてであった。これを三浦氏は世界的な問題だとし、近年の自分の趣味志向に合うものだけを追求していく傾向がメディアにあらわれているのだと説明した。こうした多元化により、志向の異なる人や立場の異なる人と接し、共有するものを見つけていくことが困難になっており、これはメディアを越えた問題だと指摘した。

また、ジャーナリズムの本質にせまるような質問もいくつが提示された。三浦氏によれば、ジャーナリズムとは民主主義社会のためのインフラであるという。社会にとって物事を考える素材を提供するのがジャーナリズムであり、そのために記者は自分で取材をして、その中で公平な目で伝えることが求められる。その際、記者は豊富なネットワークをもち、事実を確認するノウハウを身につけていることが最も重要であるのだという。

\*今 千春 神田外語大学留学生別科講師



会場風景